

階級の在処としての社会*

——社会的のものの興亡（その2）——

厚 東 洋 輔**

I. 社会問題の構成要素

「社会問題」は、当時の人々にどのように認識されていたのだろうか。

「社会科学の発展を助け、法の改正、教育の進展、犯罪の予防と抑止、犯罪者の矯正、公衆道徳の進歩、公衆衛生条例の採用、経済・産業・財政の諸問題に関する健全な諸原則の普及に関して、促進のための最良の実践的施策を一般公衆に示すこと。そこでは・・・貧困に関連する諸問題が注目されるだろう。・・・つまり現代の大きな社会問題を賢明に取り扱うための共通の場を提供するものである」（宇賀、1990, 89-90）。

これは 1865 年に創設された「アメリカ社会科学学会」の設立趣旨書である。種々雑多な困難が「貧困」の問題に集約され、それが「社会問題」の中核に位置づけられる。前段で列挙されている種々雑多な問題群は、現代の感覚からすれば、科学政策、法律、教育、犯罪、保健、産業、財政等々、本来異なったカテゴリーに属すると見なされるだろう。

1834 年に設立された「ロンドン統計学会」に視点を転じてみると、最初の 50 年間の論題の集計結果は、全体の 2 割近くが「庶民の状況 condition of the people」に関連するもので占められている。そこでは、「庶民」（のちに「下層階級」と規定される）に見られる貧困、犯罪、無知、疾病等が好んで論じられたトピックスであった。こうしたテーマ群は、前述のように、当初「モラルおよび知的」としてカテゴライズされ、のちに「社

会的」と改称されている（Abrams, 1968, 16）。

* フランスの事態については、田中拓道（2006, 78-86）の議論参照。

社会問題という言葉でイメージされるものは、国や人や時代によってバラツキはあるにしても、二つの核から構成されている点では、大きな相違はない。一つは「貧困あるいは貧民 pauperism」の問題であり、もう一つが「モラル」の問題である。社会問題は、ある人にとってはモラルの問題が本質であり、また他の人にとっては pauperism が最重要事である。優先順位など仔細にみれば若干の相違はあるにしろ、19 世紀中葉における「社会問題」が pauperism と moral という双貌を持つとイメージされていた点に関して、研究者の間に意見の相違はない。

こうした事実を前にすると、私は、なにか得心できない感じに襲われてしまう。貧困は「経済問題」として、無知や公衆道徳は「教育問題」として別々の問題をなすと、当時の人々はどうして認定しなかったのか。今日では、こうした諸問題は、異なった機関によって所轄され、異なった人員によって取り扱われているというのに。種々雑多な事柄が、「一つの」問題として一括されていたのは何故なのだろうか。一括するにはそれなりの根拠があったはずである。さらにまた、そのまともまりが、何故に、「社会」問題と名付けられるようになったのか。「社会的」という形容詞がそうした雑多のものを一括するラベルとして選ばれた理由はなんだったのだろうか。

私が疑問に思うのは、19 世紀の半ばにおいて

*キーワード：貧民層、階級、国家対社会

**関西学院大学社会学部教授

「社会問題」を存立させた「分類枠組み」の生成と構造なのである。

社会問題という「分類枠組み」の生成と構造を追究するには、19世紀中葉の史料を博捜することから始めるのが常道かもしれない。私なりにこうしたやり方も試みたが、どうしてもうまくいかなかった。そこで、それ以後において体系化された「整理枠組み」を参照して、それとの対比のもとで「社会問題」を存立させた「隠れた構造」を読み解く、という方途をとることにした。

「社会問題」の体系化を図った後代のテキストとして、フェルディナンド・テンニースの *Entwicklung der sozialen Fragen*, 1907 を選ぶことにした。この本は新書判型のハンディなもので、版を重ね、広く読まれたものである。冒頭で「社会問題」の範囲を定めることから議論を出立させている。

「私たちの知っているような、展開された形の社会問題」とは「周知のように、なによりもまず工業労働者問題 *die industrielle Arbeiterfrage* である。」(Tönnies, 1907, 1)

「労働問題」あるいは「労働者問題」というのは、「展開された社会問題」の呼称であることが窺える。テンニースは、「労働問題」を基軸として「社会問題」を理解しようと試みる。こうした「社会問題」理解は、19世紀後半のヨーロッパにおいて、次第次第に有力になり、20世紀の初頭では、「周知のように」と言われる程「通説」の地位をしめることが出来た。「社会問題」に代わり、「労働問題」の方が端的・明晰であるがゆえに、アカデミズムの世界では、学術用語として愛好される傾向さえ見られた。

しかし「社会問題」は、「労働問題」によってすっぽりと覆い尽くされるわけではない。「社会問題」は「労働問題」よりずっと広い領域をカバーしていることもまた、決して忘れ去られることはなかった。

この辺の事情をデュルケム流に表現すれば、「社会問題」は「胃袋の問題」でも「サラリーの問題」でも「労働問題」にとどまるものでない。(参照。森博の『デュルケム社会主義およびサン・シモン』記者解説 [1977: 317])。

テンニースによれば「社会問題の内容を一般的

にいえば、人々の間に見られる、経済的生活条件・生活習慣・生活意見の点で相互に甚だしく疎遠な階層・身分・階級の間、平和的な共同生活・共同作用の問題ということになる。」(Tönnies, 1907, 1)

この一般的規定に至ると、一読してその論理の尤もらしさを直ちに飲み込むことはなかなか出来ないだろう。私はこの一般的規定を三つの項目に分けて、三者の統合として再構成みることと解釈作業を施すことにしたい。

まず第一の項が「階層・身分・階級」である。テンニースは、歴史的発展の問題を考えたいために「階層」や「身分」という言葉を入れているが、「現代」の社会問題を念頭におくなら「階級」ですべてを集約させる方が分かり易い。

第二の項は「共同生活 *Zusammenleben*・共同作用 *Zusammenwirken*」である。これは、複数の階級が、一つの社会の中で、相互作用をしながら一緒に存在している状態をさす。階級と階級の相互関連、すなわち〈階級－間－関係〉に注目する、というのが第二の項のポイントだろう。

「平和的」という形容詞がさりげなく付されている点もコメントが必要だろう。これは「階級闘争」という言葉を意識して追加された限定であることは明かだろう。〈階級－間－関係〉は「階級闘争」とならざるをえないが故に、社会問題というレイベリングは、階級闘争という本質を隠蔽するのに貢献する、といった通常マルクス主義的と呼ばれる見解の一面性・狭さを、テンニースはこの追加でもって突きたかったのであろう。テンニースの本論での実際の叙述をみると、「階級闘争」の存在は十二分に認められている。「平和的」という形容詞を「闘争状態」の対極(=闘争のない状態)と解するのは、テンニースの真意を誤解させる元となる。むしろ闘争を含みつつも一つの「秩序」が形成される事態を指すために、「平和的」という言葉が付け加えられたと捉えるべきであろう。

諸階級は、闘争を繰り返しながらも、一つの社会を構成している、逆に言えば、社会は諸階級間の闘争を含む相互作用の帰結として成立する。「万人の万人に対する闘争状態」のもとにある諸個人から、いかに一つの社会が生成してくるかを

解き明かすのが「秩序問題」と言われているが、それに倣って言えば「階級闘争」を繰り返す諸階級から、いかにして一つの「社会」が成立するかを解き明かそうとするのが、テンニースにおける「社会問題」というプロブレマティークの核心をなす。階級闘争を地平にして「秩序問題」の可能性が問われているのである。

階級闘争が、たとえば相互の存在抹殺を狙うような形で一元化してしまえば、社会秩序は成立しえない。闘争が秩序へ転轍されるモメントは、階級闘争の戦線が多元化するかどうか、つまり階級の中に「地位の非一貫化」が生じるか否かである。友敵関係が存在していても、一元化しないならば、社会は解体しない。その場合には、ジンメルと言う「闘争は一つの社会形成の形式」というテーゼが見事に当てはまることになる。

こうした〈階級-間-関係〉を分節化したのが第三の項である。諸階級の相互作用は、三つの次元、すなわち「経済的な生活条件 *Lebensbedingungen*」、「生活習慣 *Lebensgewohnheiten*」、「生活意見 *Lebensanschauungen*」という三つに着目して分析されことになる。こうした三つの次元の合力として階級の共同生活・共同作用を捉える分析枠組みを、テンニース好みの表現で定式化すれば、次のようになる。

「社会生活の基底に直接現象として存在するのが、経済的生活である。第二の主要な形態が政治的生活であり、第三のそれが精神的生活である」。(ibid.)

テンニースの「社会問題」の定義は、「階級」を論理的端緒に措くと、このように体系的に解説することが可能となる。テンニースの『社会問題の発展』を注意深く読むことから分かるのは、貧困・貧民とモラルの間に「階級」という第三項を挿入すると、社会問題のまとまりが容易に理解される、ということである。

pauperism は「階級」によって生み出されるように、demoralization (モラル崩壊) もまた「階級」によってもたらされる。「階級」という共通の根を想定すれば、貧困・貧民の問題もモラルの問題も、階級社会という泥沼に咲く徒花として一括して理解することが出来る。冒頭に掲げた趣旨書に戻れば、「社会科学の未発達」に始まり「貧

困」に終わるさまざまなトラブルあるいは困難を、一つの問題として統括できる根拠を提供するものこそ「階級」に他ならない。

すべて「階級」に関連するが故に、一つの問題として一括的に構成することが可能になる。しかし、こういわれるとなんでそうした言い換えが許されるのか反問したくなるだろう。「階級の問題」と名付けた方が素直ではなかったのか？ 階級 class という名詞には、それに由来する形容詞形がないことが、「階級の問題」という名称が成立しなかった大きな理由なのかもしれない(あるいは逆に「階級」に由来することどもを形容する言葉として social があったので、形容詞形が不要になったのかもしれない)。

こうした疑問に対して私の到達しえた答えは次のようなものである。19 世紀の中葉では、「社会」と「階級」は慣例 convention によって意味的に結びつけられていた、こうした意味的なつながりの習慣こそが 19 世紀における社会観の特性であると。事実を事実として端的に受け取る立場である。

社会を動かしているものは「階級」である、階級こそが、社会の中で生起する出来事を解明するための鍵を提供する、こうした社会把握を〈社会の階級モデル〉と呼ぶことにしよう。こうした〈社会の階級モデル〉は、「社会問題」を如何に認識し、それをなんとか理論的に理解しようとする試みの中で、次第次第に練り上げられて来たものである。

社会問題の構成問題を追究していく中で、「階級」を本質と見なす社会イメージに至りついた。この道筋は私なりに苦勞して発見したつもりであったが、例えばフィリップ・アブラムズ Abrams の記述を再読すると、何のことはない、それは欧米人の「常識」であることが分かる。condition of the people を彼はさりげなく次のように置き換えている。poverty, crime, illiteracy, and so forth among the lower classes. 「階級」を根茎に (among the lower class)、「poverty」および crime, illiteracy and so forth といった「モラル」の問題が、徒花として咲き乱れている池 (泥沼) のイメージ、これが「社会問題」であり、こうした泥沼を生み出す特異な地形が「社会」と呼ばれる。

以上要するに、社会問題を端的に規定すれば、それは、pauperism, moral, class という三つの項から作り上げられる問題群に他ならない。

II. エンゲルスと〈社会的なもの〉

「社会」を「階級」の集積態とみなす階級社会論の起点はどこに求めたらよいのか。テンニースが社会問題を規定する際に念頭に浮かべていたのは、多分フリードリッヒ・エンゲルス Friedrich Engels の『イギリスにおける労働者階級に状態——著者自身の観察および確実な文献による』Die Lage der arbeitenden Klassen in England: Nach einiger Anschauung und authentischen Quellen (1845) と思われる。この推論は、階級の捉え方の類似性、テンニースの読書歴などから見て、私自身はほぼ間違いないと思っている。

エンゲルスは、紡績会社「エルメン・エンゲルス商会」の企業主の息子として生まれた。ブルジョワの生まれにもかかわらず学校に通うといった正規の教育を受けることなく、父の元で実業に従事しながら、自学自習で自己形成を図った。1842年から2年間、父の会社の工場のあるマンチェスターに滞在し、そこでイギリスにおける工場制機械工業の実態について実地の見聞を重ねた。1844年、ドイツに革命を起こすため帰国することにした。帰国途中のパリでカール・マルクスと出会ったが、この出会いは後に「歴史的会見」として言い伝えられてきたものである。会見ののち直ちに革命活動の一環として執筆を始め、その翌年刊行されたのが本書である。25才の時に出版されこの著作は、エンゲルスに固有な見解、関心、持ち味等々を知る上でもきわめて貴重である。

1840年代の後半は、マルクスとともに革命運動の実践に専念する。しかし活動の甲斐もなく1848年革命は失敗に終わり、ロンドンに亡命することを余儀なくされた。この時期の成果が、マルクスと共同執筆した『共産党宣言』(1848)である。

1850年から70年までの20年間は、有能なビジネスマンとして実業に従事した。ビジネスマンとしての生を全うすることを通して、マルクスの生活を支え、彼が研究と執筆、それに政治活動に

専心することを可能にした。1883年に僚友マルクスが死んだのちは、マルクスの遺稿を整理し、刊行する作業に熱心に携わった。マルクスの死後自らが再び政治運動の表舞台に出ることを許し、単独名での著作を執筆し発表もしている。

エンゲルスは、その生涯をかけて、天才マルクスとの出会いによって開示された「使命」を誠実に背負い続けた。自己の創造性を賭してマルクスの名前を人類史の中に刻み込み「マルクス主義」を創始した。深く尊敬しながら自己を失うこともない希有な人柄のエンゲルス。マルクスとエンゲルスの二人三脚は、エンゲルス以外の人物では到底考えることの出来ない、空前絶後の出来事であった。

『イギリスにおける労働者階級の状態』には、全編を通して「社会的」sozialという言葉が乱舞している。まさに〈社会的なもの〉の体系的な分析に捧げられた最初の作品といえるだろう。エンゲルスは、次のように、自己の問題意識を披瀝する。

「労働者階級の状態は、現代のあらゆる社会運動の現実的土台であり、出発点である。というのは、それは、我々の間に現存する社会的困窮の最高の・もっとも露骨な頂点だからである。」(Engels=1845, 232: 訳、227ページ)。社会的困窮すなわち社会問題を解決するためには、労働者階級の現状を科学的に探求する必要がある。

そのために、エンゲルスがたてた研究計画は実に周到である。

「私は諸君(労働者階級)の生活状態を知るために、出来る限り誠実な注意を払ってきた。私は入手できる限りの公式・非公式の様々な文献を研究してきた。——私はそれだけでは満足しなかった。私は私の研究対象について、単なる抽象的知識以上のものを求めた。私は諸君の住宅を訪ね、諸君の日常生活を観察し、諸君の生活条件や苦悩について語り合い、諸君の圧制者の社会的・政治的権力に対する諸君の闘争をこの目で見たいと思った。そして、私はそのようにしたのである。」(Engels=1845, 229: 訳、225ページ)。

20代前半のエンゲルスは、現地駐在の工場主の息子という地位を利用して、約二年間に渡りフィールドワークを敢行したといつてよい。副題の

「著者自身の観察および確実な文献による」は、単なる大言壮語ではない。「労働者諸君 Arbeiter!」に始まる冒頭の「献辞」を読むたびに、エンゲルスの初々しさに心うたれる。彼の生涯はまさに「初心忘るべからず」の一生であった。

労働者の「状態 Lage」とは、狭く「労働条件」のみを指しているわけではない。なによりもまず労働者の「生活状態」を意味していた。エンゲルスの第一義的関心は、「生活」におかれていた。「階級」は、「生活」を分析するための概念装置として位置づけられている。

「生活状態」は、居住、労働時間、賃金、労働環境、意識、運動等々、様々な項目に関するディテールから立体的に構成されている。テンニースもまた「生活状況」から出立し、生活を規定する様々な要因群に、十分な注意を払っていた。テンニースの場合、生活を規定する要因群は、経済→政治→思想、という順序に、影響力の強さに従い並べられていた。しかしエンゲルスは、(予想に反して!) そうした決定力のヒエラルヒーを想定してはいない。

劈頭のセクションでは、研究対象である「労働者」の範囲を画定する作業が行われる。「労働者」は、分業、水力とりわけ蒸気力、機械装置という三つの力によって作り出された「新しい世界」の「新しい人間カテゴリー」と規定される。分業、蒸気力、機械の三つの力は「在りし良き時代」の小中間層を破滅させ、その代わりに、一方では富裕な資本家を、他方には貧困な労働者を析出した。新しい人間カテゴリーである労働者を、エンゲルスは「工業プロレタリアート」と名付ける。「プロレタリアートは、以前はブルジョワになるために通る一つの門に過ぎなかったが、いまやはじめて真実の・固定的な一つの階級となった」(Engels = 1845, 251 : 訳、245 ページ)。

研究対象として選び出されたのは、働く人一般ではなく、「階級」としての労働者である。

三つの力をおのれのために利用し、生産力に転化しうる能力を持つのは、資本金のある資本家だけである。三つの力を掌握した資本家はますます豊かになり、それが出来ない小さな資本家は没落する。資本家どうしの競争により資本の集積はとどめ難く進行する。

資本の集中化傾向と軌を一にして、人口の集中もまた必然化される。労働者は分散した作業場から大規模な工場へと移動する。人々が村から町へと大挙して移住する結果、「大都市」が成立する。大都市が出来ると、労働者の間の「競争」はますます激しくなる。資本家同士、労働者同士の「競争」——エンゲルスは近代社会を支配する競争の無差別性と無際限性に注目し「社会的戦争」der soziale Krieg (Engels = 1845, 359 : 訳 364) と名付ける——は、周期的な恐慌を産み落とす。機械化による労働の単純化、競争に勝ち残るための人件費節約の要求等々の諸要因は、相互に結びついて、外国人労働者の雇用を、すなわち「アイルランド人の移住」を必然化する。「イギリス工業の急速な膨張は、もしもイギリスが、思い通りに処理できる予備軍としてアイルランドの多数の貧しい人口をもっていなかったとしたら、おそらく起こりえなかったであろう」(Engels = 1845, 320 : 訳、321 ページ)。

労働者の生活状態は、大都市形成(都市化)、競争(周期的な恐慌)、アイルランド人の移住(外国人労働者の流入)、という三つの原因群毎に、独立のセクションを用いて、詳細かつ具体的に検討される。本著作の白眉をなす分析を終えたあと、エンゲルスは、労働者に対する帰結のまとめに入る。すこし長いが、彼の結論を引用しておこう。

「もしもある個人が、他の個人に対して死を招くような傷害を加えたならば、我々はこれを傷害致死とよぶ。もし加害者が、あらかじめその傷害が致命的になることを知っていたならば、その行為を殺人とよぶ。すると、もし社会が、何百人ものプロレタリアを、思いがけない不自然な死に、必然的に陥らざるをえないような状態におくとすれば、またもし社会が、何千もの人から必要な生活条件を奪いとり、彼らを生活できない境遇におくとすれば、またもし社会が、彼らを法律という腕力によって、こうした境遇の必然的な結果である死が訪れるまで、強制的にしておくとしたら、さらにもし社会が、これら何千もの人がこうした諸条件の犠牲となって必ず倒れることを知っており、知りすぎていながら、それでもなおこれらの諸条件を存続させているとしたら、それこそ

まさに、個人の行為と同じように殺人である」。「イギリスの労働者新聞が正しく名付けたように、それは社会的 sozialen 殺人」である。(Engels = 1845, 324-5 : 訳、326-327 ページ)

「個人」の不幸な運命の責任は、火を噴くような言葉の重なりの中で、「社会」Gesellschaft に帰責されている。サッチャー Thatcher が忌み嫌った思考パターンをこれほどみごとに示しているサンプルはあるまい。廃棄を求められた「思考の習慣」の創始者として、エンゲルスを逸することは出来ない。

*「社会の同じ一員」であるこれらの人が、「今こそ社会の救援をもっとも多く必要とするその時になって、平然とかれらを見捨ててしまう社会の残酷さ」(304、訳、304 ページ)。異った「階級」の人々も同じ「社会」の成員と認識されている点に注意。

労働者の困窮の責任を社会に負わせるために——それが「社会的」困窮であることを証明するために、「階級」という分析装置が威力を発揮している。

社会の下層に位置する人々は、いつの時代においても困窮していた。古典古代の奴隷、中世の奴隷も惨めな境遇にあった。その惨めさの根源は主人による人格支配に由来する。近代の労働者は、本質的に「自由」な存在である。労働者の惨めさは、「階級」という概念装置を用いて、初めて明晰に把握することが出来る。というのは「労働者は、ある一人の有産者の奴隷であるのではなく、有産者階級全体の奴隷であるからである。」(Engels = 1845, 310 : 訳、311 ページ)

*階級の視点とは別に個人的に見れば、イギリスのブルジョワは、ドイツのそれに比べれば、社会の一人一人の成員に対しては、社会の義務を認める人が多い、しかし「階級」としてみれば、「深く墮落し、私利私欲に内面まで蝕まれ、あらゆる進歩に対する能力を失っている」(Engels = 1845, 486 : 訳、510 ページ)。(なお [Engels = 1845, 502 : 訳、529 ページ] も参照。)

イギリスの労働者は、中世の農奴、ドイツの働く人々の手に残されていた活動の独立性の最後の残り滓まで奪い取られた。工業プロレタリアートは、失うべき何もかも残されていない点で、困窮

の極みに位置する。「しかし、まさにこうすることによって、労働者にものを考え、人間としての地位を要求するよう刺激を与えたのである。」「産業革命が起こらなかったら、確かにきわめてロマンチックで情緒に富んではいたが、人間にふさわしくないこうした生活から、決して抜け出ることはなかったであろう。」(Engels = 1845, 239 : 訳、232 ページ)

労働者の生活状態は、個人的な性格や努力によって千差万別である(この点では資本家も変わらない)。事実の具体的で詳細な調査により「例外に」目を奪われてはいけない。「階級」という把握を通して「我々はまずこの共通点を取り上げ、全般的に論じなければならない。そうすることによって私たちは、あとでもっと厳密に、個々の部門のそれぞれの特色を観察することが出来るであろう。」(Engels = 1845, 253 : 訳、247 ページ)。

人々はまず「階級」に止目して、その共通性が把握される。「階級」と把握することによって、人々の個人的な関係を、階級間の関係として、その特色を「全般的に」論じることが出来る。労働者の資本家に対する従属は、個人の関係に分解されるなら、それは両者の利害に由来する「自由な」人間関係といわざるをえない。その「不自由さ」・従属性が明らかになるのは、「階級間の関係」として両者の関係を見直したときだけである。労働者「階級」に着目することにより、労働者の生活の個別的なディテールは、労働者の過去・現在・未来の全体像を構成するピースへととしてしっかりと嵌め込まれる。

Ⅲ. 社会の階級モデル

エンゲルスの最初の著作を手引きに、階級理論の社会学史上の意味を確定しておくことにしよう。

階級概念は「社会問題」を分析するために練り上げられた概念装置で、レイモンド・ウィリアムズ R. Williams によれば「middle classes と working classes が一般的用語になったのは、1840 年代になってのことであった。」(Williams, 1976, 64 : 訳、73 ページ)。

社会問題は「直接目に見える現象」、社会はそ

の奥に潜むそれを生み出す原因、社会問題はファザード、社会は直接目に見えない建物の骨格、という対比の比喩を思い出しただきたい。「階級」は社会の骨格を浮き彫りにするための概念である。

「階級」が「社会」の関する的確な骨格概念であるかどうかは、表層に位置している「社会問題」を、階級概念を用いることによって、体系的に分析できるかどうかによって判定することが可能である。エンゲルスの著作で、この点を調べてみよう。

住宅、衣と食、失業、アイルランド人の移住、結核等の医療や保健、飲酒、慈善施設の実態、死亡率・出生率、教育、犯罪・非行、買売春、賃金、労働時間、労働環境・労働災害、児童労働、家族解体および性関係、高齢者および退職以後の生活、現物支給（トラック・システム）と小屋制度（社宅制度）、労働の団結および組合、ストライキや労使紛争、工場法・10時間労働制限法、選挙権、ラダイツ、チャーティズム、穀物法廃止問題等々、エンゲルスは、「社会問題」として論じられてきた具体的な項目すべてについて、統計的データ・証言・観察を駆使しながら、きわめて詳細に検討している。彼の視野の外におかれている社会問題の項目を思いつくことは出来ない。

議論の網羅性以上に一読して感銘を受けるのは、議論の体系性である。社会問題を構成している諸要素は、個々バラバラに論じられるのではなく、労働者と資本家との間の階級関係という枠組みに従い、しかるべき場所で、相互の連関が判然とする形で、きわめて整然と論じられている。様々な問題群の繋がり の必然性が理解可能である。現時点で人々が直面している困難は、バラバラな諸困難の寄せ集めではなく、「社会問題」というラベルに括り込むことが適当な所以がよくわかる。

現代の困窮は、現在の階級関係が必然的に生み出すものであり、階級関係を根本的に変革しない限り、解決することは出来ない。「社会問題」の歴史・現状・解決は、階級概念を用いると、ワンセットとして把握することが可能になる。「階級」は、遺伝子の二重螺旋モデルのように、「不可視の存在」である「社会」に関する巧妙なモデルで

ある。社会の階級モデルを設定することにより、社会問題という経験的事実について、その過去・現在・未来は、もっとも簡明な形で「説明」することが出来るのである。『共産党宣言』の冒頭を飾る有名な一節「今日までのあらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」が孕む高揚感は、「不可視の存在」である「社会」の本質をようやく突き止めることが出来たとするマルクス・エンゲルスの思いの所産であるといえよう。

〈社会の階級モデル〉について、その特徴を三点にまとめておこう。

1. 「階級」とは、まず、「経験的に確定可能なメルクマールによって限定された人間の集合」を意味する。

日本の場合、マルクスの影響力が決定的なもので、資本家と労働者を分かつメルクマールは生産手段の所有／非所有だ、と端から決めつける人が多い。トクヴィルの場合には、もっと広く「財産の所有／非所有」であったし（有「産」階級／無「産」階級）、エンゲルスでも、1845年以前では「競争」「機械利用」「工場制」等々、資本家と労働者を分かつものは、一つメルクマールに固まっていたわけではない。生産、消費、居住等々、階級を規定するためのメルクマールは、生活実践のあらゆる局面から選り出されている。

収入のような客観的な指標もあれば、運動への参加、連帯感のような、行動あるいは／および意識に関わる指標を用いても構わない。「社会運動」のアクティブなメンバーという指標で「階級」を構成することはもとより可能である。「客観的」に言えば、資本家階級に属するものでも、労働者のシンパとして「労働者階級」（の一部）に所属しうる。エンゲルスがまさにそのような存在であった。意識的な「対自的」階級の生成は、常に客観的な「即自的」階級の枠内に閉じこめられているわけではない。

マルクス（エンゲルス）の階級論は、社会の階級モデルの典型であるが、階級理論はそれに限るものではない。class は、社会学の用語でいえば、「集団」と重なる部分がきわめて大きい。

エンゲルスは、「生活」の地平における相違を説明するために階級概念を用いている。「階級」

は「生産過程」を分析するための装置ではない。彼の用語法に従えば、「階級」の本来の故郷は「経済」ではなく「社会」にあるというべきであろう。

2. class は classify (分類する) から派生した名詞で、通常の訳語は「部類」であろう。分類の問題を学問の世界で考えれば、生物の分類学は、18世紀半ばにリンネの努力によりその骨格はほぼ定まり、19世紀では分類学は学問の最先端に位置していたといつてよい。リンネ分類学のキー概念である「種 (あるいは属)」概念は、ダーウィンの『種の起源』により歴史化されることになった。

クラス (階級) は社会科学における「種」の概念に相当する。

リンネは自然界におけるすべての種の目録づくりを目指し、そうすることによって『自然の体系』を把握しようと考えた。「階級」と「集団」の相違は、前者は一つの世界を網羅的に把握しようとする意志の産物である点に求められる (「集団」の場合、個物一つを独立して定義することも可能である)。「階級」は、一つで孤立して存在するのではなく、常に一つの世界を「編成する」formation のための相互関連した「項」を意味する。諸階級は寄り集まって、全体として一つのシステムを構成するとイメージされている。

「種」が寄り集まって出来るのが「自然界」であるとすれば、「階級」が寄り集まって成立するのが「社会」である。逆にいえば、「社会」という「全体」を的確に認識するために作り出されたのが「階級」という「部分」である。

エンゲルスの議論を例に取れば、「(近代) 社会」の骨格は「資本家」と「工業プロレタリアート」という二大階級からなるシステムとして把握される。「工業プロレタリアート」をさらに分類すれば、「工場労働者」「それ以外の工業労働者」「鉱山労働者」「農業労働者」最後に「アイルランドからの移住者」へと分割することが出来る。こうした細分類は並列されるものではなく「工場労働者」を頂点として「系統樹」として配列されている。

「クラス (階級)」の集合が「社会」、「社会」の

構造と機能は「クラス (階級)」活動の合成として把握される。クラスを部分、社会を全体するこうした社会観を〈社会の階級モデル〉と呼ぶことにしよう。

* 〈社会の階級モデル〉の、私たちのもっとも馴染みのものが「学校」である。たとえば、「水無瀬高等学校」を説明するのに、一年3クラス、二年4クラス、三年5クラスからなる、一クラスは40人の生徒からなり、クラス担任の教員数は2名、クラス分けは男女の区別を問うことなくアイウエオ順でおこなわれている等々、こうした説明の仕方は、学校説明会でよく聞かされるパターンであろう。クラス (学級) 別に学校を運営する仕方は、19世紀のヨーロッパを起源としている。「学級の社会史」といった業績を読んでいると、学級はクラスであり、クラスは階級である、両者はともに、19世紀のヨーロッパを土壌に生まれたものである所以がよく理解できる。

3. 「階級」概念の近代性は、どんな下層の「階級」でも社会の正規のメンバーとして取り扱われているところに求められる。「プロレタリアート」が社会の正規のメンバーであることは、ポスト・フランス革命の時代に生きる私たちにとっては自明のように見える。「プロレタリアート」は、本来の意味に従えば、社会の「外」に存在する貧民のことであった。アリストテレスの『政治学』では、自由民である商工業従事者 (「俗業者」) を、ポリスのメンバーとして遇するのが適当かどうか、という問いが立てられている (第三巻第5章)。その答えは、「ポリスの存続に必要な人々を、すべてポリスの正規のメンバーとなすべきではない」というものである。プロレタリアートが都市国家にいかにも必要であろうとも、彼らは都市国家のメンバーではないのである。

こうした思考法は、フランス革命以降になると、原則として拒絶される。「工業プロレタリアート」は、いかに悲惨な境遇にあらうとも、彼らは社会の一員である。社会の正規メンバーという前提があるからこそ、彼らの悲惨さは糾弾の対象になるのである。おなじ仲間を死に追いやるから「社会的殺人」という表現は可能となる。

学校における「学級」と社会における「階級」との相違を求めるとすれば、それは、後者では、様々な部類は縦に並べられ、ヒエラルヒーをなす

と捉えられている点にある。階級間の差異は、なによりもまず「格差」さらにいえば「差別」として把握される。「格差」の種類、「差別」の内実は、経済的なものから始まり、政治的、社会的、文化的等々様々であり、強調点の置き方も時代や認識者、所属集団の相違によって実に様々である。しかし、「差異」が「格差」あるいは「差別」と認定される点についていえば、様々なタイプの階級理論を貫き斉一である。

差異と差別の同一視は、平等の理念に対する帰依の現れである。人間は生まれながらにして平等、もう少し正確に言えば、人々を「人間」という同一のカテゴリーのもとに捉える理念が前提にあるから、階級間の差異は「格差」／「差別」として告発の対象となる。「階級」は、生活状況の中から「格差」／「差別」を探り出し、それを是正するための方法論的武器となる。

不平等性を暴き、批判したいという動機が強すぎると、「工場プロレタリアート」は機械の「奴隷」であるとか、賃金「奴隷」であるとか、近代以前の事例と区別の付かないような表現形態にしばしば陥り勝ちとなる。階級は、インパクトを求めて、カーストや身分と積極的に混同されさえもする。しかし格差を永久不変な存在と見なすたとえばカースト制度は、ここで呼ぶ〈社会の階級モデル〉には当てはまらない。不平等、格差という経験的事実を素朴に反映したものが階級理論ではない。平等の理念という抗—事実的仮定がどうしても必要である。不平等は社会の産物である、そうである以上、社会の作り替えによって格差は是正出来るはずである。格差が存在しない「無階級社会」への憧憬が弱まると、かえって階級理論は没落する。階級理論のエネルギー源は、厳しい格差の存在ではなく、格差に対する厳しい否認要求である。

カースト制度や身分制度は「前近代的な」原理に依拠するものである限りにおいて、ここで呼ばれている〈社会の階級モデル〉の埒外にある。「身分」とか「カースト」とかいう表現が頻発される場合でも、「階級」が近代的存在であり、身分・カーストとは概念上峻別されるべきものであることは、自明の前提であった。

社会問題という顕示的レベルと社会という隠された次元を繋ぐ概念装置、それが「階級」である。〈社会的なもの〉を階級でもって体现させるのが〈社会の階級モデル〉である

IV. シュタインにおける国家と社会

エンゲルスについて、「影の社会学者フリードリッヒ・エンゲルス」いうタイトルの一節を割いて、ランドル・コリンズ Randall Collins は、次のような才気煥発な議論を展開している。

「実際には、フリードリッヒ・エンゲルスの方がマルクスより社会学的な思想家であった」。(Collins, 1985, 56: 訳, 52 ページ)。「身もふたもない言い方になるが、マルクス個人の迷宮のなかには、社会学が入り込む余地はなかった。彼の見方のなかに社会学の息吹を吹き込んだのはエンゲルスであり、エンゲル自身の著作こそが(中略)、社会学がこの『マルクス主義』の考え方から学ぶものを伝えているのである。」(Collins, 1985, 60: 訳, 57 ページ)。そして結論。「マルクスの生涯の出来事の中で社会学にとって決定的なのは、疑いもなく、かれがエンゲルスの友人になったことにある。」(Collins, 1985, 59: 訳, 55 ページ)。

私もまた、〈社会的なもの〉と「階級」を等置するものの見方の典型を、エンゲルスに求めた。だからといってエンゲルスが「知的で偉大な歴史社会学者」であったと主張したいわけではない。というのも 19 世紀中葉で「社会学者」という名称を使うのは、時期尚早であるというのが私の立場だからである。

〈社会の階級モデル〉の祖型をエンゲルスに求めるような議論をしてきたが、〈社会の階級モデル〉は、エンゲルス一人の力で構想されたものではない。むしろ、こうした社会観は、19 世紀という時代の産物であるといいたくなるほど、多くの人々の自然発生的協働によって作り上げたものだからである。

アカデミーという世界に視点を限るなら、ロレンツ・フォン・シュタイン Lorenz von Stein の方が、重要な人物と言えるかもしれない。

明治憲法を制定する際、極東という世界の「辺

境」に位置する日本人がシュタインに意見を求めたことから窺えるように、当代における彼の名声は確固たるものであった。ヘーゲルの家族／市民社会／国家の三分法を換骨奪胎し、社会 vs. 国家という二項図式に整理体系化し直したのは、Lorenz von Stein の功績である。トクヴィルの暗々裡に前提としていた政府と社会の区別は、理論的な定式化が施されることになった。

デンマークとプロイセンの争奪の的であったシュレスヴィッヒに生まれたシュタインは、1841年にパリに留学することになった。そこで当時活躍していた「社会主義者・共産主義者」たちと積極的に交際し、その思想と行動をつぶさに見聞した。その成果を翌年『現代フランスの社会主義と共産主義』としてまとめあげた。1848年革命の際、ちょうどパリに公務で在住していたシュタインは、「社会運動」の実際の展開に親しく見聞する機会に恵まれた。そこでの知見を活かして前著を増補改訂し、大著『1789年から現代に至るフランス社会運動史』Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage, 1850年を公刊した。（二年後にまた増補し三訂版に仕立て直されている。改訂されるたびに一卷本、二巻本、三巻本と分量は増えている。）この著作は、「社会運動」という当時のアカデミックスカラーには思いもつかない「斬新な」切り口から、「社会問題」の過去・現在・未来を歴史的＝理論的に一望の下におこうと試みた野心作である。

彼が眼前に見据えていたのはトクヴィルと同じ「現実」（二月革命時のパリ）である。それを理解する枠組みとして引照されていたのがヘーゲルである。シュタインの生育した思想的土壌は、マルクス（ある程度においてエンゲルス）と同一である。第一巻の「社会の概念とその運動法則」は、現実の社会運動を分析するための枠組みが提示されている。

人間の共同生活（共同体）は、「国家」と「社会」という、全く異なった二つの領域（器官＝有機体）からなる複合体として捉えられる。「国家」は人々の共同生活に「人格的な意志と人倫的統一性を与えるもの」である。「シュタインは、ドイツ観念論の伝統的な国家概念を引き継ぎ、国家を

『その人格性において意志と行為として立ち現れる人間の共同体』と定義する」（廳茂、1994、5ページ）。

「人格的なもの」である「国家」に対して、「社会」は「非人格的で自然的なもの」と対照的な形で規定されている。「社会」の端緒は人々の欲求とその充足におかれている。廳茂はシュタインの「社会」概念について、よく噛み砕いた読解しているので、彼の仕事に依ることしよう（廳、1994、5～6ページ）。

人間の欲望充足は、人間の労働による自然の加工と、その結果としての財の獲得過程を必須不可欠な前提としている。シュタインは財の生産・所有が、その素材の有限性のために、つねに排除をはらんだ不平等を含まざるをえないと考えている。そこに「階級」が生成してくる根拠がある。階級の必然性ゆえに、労働と所有に基づく秩序は、権力を仲立ちに支配－隷属の関係にならざるをえない。所有の不平等は、法や家族、教養などを通じて再生産的に固定され、支配・被支配の政治的關係として立ち現れる。つまり財の生産・分配に関わる「労働と所有の秩序」は、法や家族、文化、政治、といった領域と一体となった形で編成されることになる。財の循環に制約された共同的な生活秩序をシュタインは「社会」と名付ける。シュタイン自身の言葉を用いれば「社会」とは、「財の配分に制約され、労働の有機体によって規制されるとともに、欲求の体系によって動かされ、家族と法によって一定の世代に持続的に固定化された人間生活の有機統一的性」（Stein, 1850, 29）ということになる。

〈利害－労働－所有〉を基盤とする「社会」は、有産者と無産者という階級に分裂せざるをえない。「社会」は、無産者の自由と平等を求める運動、すなわち「社会運動」を、自らの胎内から必然的引き起こす。

「社会問題」とは、「資本と労働の対立」と「純粋な商品」であるプロレタリアの困窮を本質とする限りにおいて、「文明化した世界の生活全体の主要問題」をなす。こうした「社会問題」を解決するために何よりもまず必要なのは、「社会」に固有な運動の論理を的確に認識することである。そのために構想されたのが「社会の学 Wissen-

schaft der Gesellschaft (のちに Gesellschaftslehre と改称)」である。

「社会」が自己の胎内から生み出す「社会運動」によって「社会問題」は首尾よく解決されうるのだろうか。「社会の学」の創始者シュタインの解答は「否」である。というのも「社会運動」は「個人の利害」に由来するものだからである。「社会」の矛盾が生み出す社会の問題性すなわち「社会問題」を解決するために、「社会」の対極に「国家」という領域が措定されざるをえないことになる。

「国家」は、共同体の「人格的意志と人倫的統一性」を現実化する有機体である。人間の理念的本質は人格の自由と個性の完成に求められる。人々は、他者との相互的存在という条件の下で人間としての人格的完成を遂げるには、どうしても「国家」に赴かざるをえない。国家は、人々の人格的な自己実現のために、「社会」に働きかけ、それを自己の論理に従属させる必要がある。

国家の原理が、すべての人々の完全な自由、完全な人格への発達にあるとすれば、社会の原理は、すべての人々が他者に屈服することであり、他者への隷従を土台に自己を完成することである。「社会」におけるあらゆる出来事は階級対立に貫かれている。「社会の原理」は、「国家の原理」の嚮導のもとに「人格の原理」という高次元原理へと包摂されねばならない……。

議論をこの辺まで追究してくると、ドイツ観念論の国家概念に共感できないものには、なかなか納得しにくい。

議論の細かい段取りをこれ以上テキストに即して追究することなく、ハンス・フライヤー Hans Freyer のきわめて見通しのよいシュタイン評価を掲げて、議論を締めくくりにしておこう。

「たしかに、かれの見解によれば、支配的社会階級の単なる代表者でなく、まったく独自の實在であるプロイセンの専制政体およびその官吏層には、錯綜とした経済的利害を突破して『社会的王国』 soziales Koenigtum となろうとする力が内在していなくてはならない。ヘーゲルに発するこの『国家社会主義的』解決は、後の人々すなわちロードベルトゥス、シェフレ、アドルフ・ワグナーに影響を与えた。それは結局、国家を社会よりも

卓越した権力と認めるにもかかわらず、決して社会問題の空想主義的な解決と混同すべきではない。というのはシュタインの議論は、現実の社会力や社会運動のきわめて正確な分析によって基礎づけられており、また国家の『理念と現実』との区別を、十分に意識していたからである」(Freyer, 1931, 73-4: 訳、97-98 ページ)。

プロイセンが「社会的王国」である所以は、(政治運動の後身たる)「社会」運動に担われた(政治的革命に代わる)「社会的」革命を「上から」推進する国家だからである。シュタインの場合、「社会的」とは、〈階級を本質とする社会〉に関連するということである。シュタインのターゲットは〈社会的なもの〉を如何に理論化するかに絞られている。〈社会的なもの〉を階級の所在地とする定義に関する限り、シュタインもまた〈社会の階級モデル〉の彫琢者の一人に数えられるだろう。

V. 社会政策学と経済学の間

一章〔前々稿〕、二章〔本稿〕の議論を前提にすると、専門的な学科としての社会学が生誕した歴史的地点を正確に標定することが可能となる。

議論の起点となるのは「社会問題」である。「社会問題」の解決が 19 世紀中葉における共有された目標である。社会問題を解決するためにはどうしたらよいのか。解決のために選ばれた方策は 19 世紀という時代的背景を離れては考えられないもので、それは社会問題解決のために「新しい科学」を構想することであった。社会問題という共通する問題、新しい科学という共通の解決策、この二つがセットとなって 19 世紀中葉の思考的風土は形作られる。

社会問題解決するために構想された新しい科学は、これまでの議論をざっとおさらいするだけで、多種多様であることが分かるだろう。イギリスにおける「統計学の道徳的部門」、アメリカにおける「社会科学」、フォン・シュタインの「社会の科学」、それにエンゲルスの「科学的社会主義」(「空想的」社会主義と峻別された)等々。19 世紀中葉においては、社会問題を解決するために召喚された学問は「社会学」のみではない。むしろ

ろ *sociologie* という名称は、当時ではマイナーだったと思っていた方がよい。19 世紀中葉における社会の思考は、政治的には、右から左まで、階層的に見れば上層から下層まで、さまざまな考えが呉越同舟する「神話」時代、知的英雄達が在野を駆け巡る「戦国」時代であった。

こうした星雲状態からの離脱を促す画期的な出来事が 1872 年のドイツにおける「社会政策学会」の結成である。「社会政策学会」には、当代の錚々たるアカデミックスカラーが名を連ね、政府の高官をも巻き込みつつ、政治的な意思決定のあり方にもそれなりの影響を与えることの出来た〈スーパー学会〉であった。この時点を境に社会問題解決のための「新しい科学」は、在野の学問から、アカデミーの中の「新しい専門科学」へと、舵取りの方向を変えることになったのである。

ここで国家 vs. 社会の二項対立図式を用いて、問題状況を整理しておこう。社会政策学会は、社会問題を解決する主体を「国家」に期待する典型的立場である。その場合、「社会問題」とは、「社会」を場所として生起する諸困難をさす。「環境問題」といった場合と同じように、「社会」とは問題が生起する場面であり、「国家」の行使する解決施策が実施されるための対象領域をさす。国家が能動的主体とすれば、社会には受動的対象という役割が割り当てられる。*Sozialpolitik* と言うネーミングは、「社会」に対する「政治」の働きかけを端的に示している。「社会政策」とは〈社会をターゲットとする政治〉を意味する。

当然に逆の立場もあり得る。「それは政治の問題だ」といった時、その問題を解決できるのは「政治」だけで、例えば、「経済」などが口出しをしてもうまくいくはずがない、ということが含意されている。それと同じように「社会問題」は、それを解決しようとするならば、「社会」を主体とするほかない、「国家」などが出しゃばっても、問題を紛糾させるだけで根本的解決に至りつくことはできない、とする立場があり得るだろう。「社会」は問題発生場所であるばかりでなく、問題解決のための主体でもなければならない。あるトラブルが「社会問題」と認定されるなら、その困難は、「社会」によってしか取り除くことは

出来ない。「社会」が自らに働きかけない限り、社会問題は根本的に解消されえない。社会問題の解決主体を「社会」に求めるこうした立場の典型が「社会主義」である。社会主義とは、国家／政治に対する社会の優位を高らかに謳い上げた主義主張である。「社会学」も、「社会政策学」と自らを区別しようとするなら、社会問題の解決主体として「社会」を召喚せざるをえない。この点において、「社会学」と「社会主義」は共同戦線を張る。19 世紀の最後の四半世紀に入ると、〈社会問題を解決するための新しい科学〉は、「社会」に問題解決を託する〈社会主義的〉傾向と、「国家」に期待を寄せる〈国家主義的〉立場とに二分されることになった。

* 第三の立場として、「国家」にも「社会」にも解決主体を認めないものが考えられるだろう。こうした立場の典型が「共産主義」である。日本では、マルクス主義の影響もあり、社会主義と共産主義とが並列されることが多い。しかし、ヨーロッパのコンテクストでは、別物と遇されるのが普通である。「社会」の潜在能力を最大限に見積もるのが「社会主義」、社会ではなくコミュニティあるいはコミュニンによってしか問題解決は出来ないとするのが「共産主義」である。社会主義にとって重要なのは、社会の改革・社会の作り替えであるとするれば、共産主義が求めているのは、社会の廃絶・社会の死滅である。「社会的」は、社会主義においては、ポジティブな組織象徴を意味するが、共産主義では、ネガティブで、過渡期的あるいは克服されるべきものという意味から自由になることは出来ない。

「社会学」は、社会主義とともに、社会を主体に社会に働きかけて社会問題を解決する——〈社会の自己組織化〉という共通のスタンスを選びとった。こうした立場を取ることによって、今度は、社会主義に対して自らをいかにして差異化してゆくかという難問を招き寄せることになった。この難問に直面していた「社会学」に、解決のための格好の範例を提供したのが経済学における「方法論争」であった。

経済学の方法論争は、1883 年にカール・メンガーとグスタフ・シュモラーの間で始められ、欧米の経済学界全体へと波及していった一大論争である。シュムペーターの『経済学史』（『学説と方

法の諸段階』)の議論を精査し直すと、社会学が学制的自立を果たすために、経済学にどのように追随し、どの地点で分岐したのかが良くわかる。経済学の歴史の裏面として社会学の成立史を描き出すというこの著作の面白さは、マックス・ヴェーバーの編纂した『社会経済学講座』の一卷として構想・執筆されたものであることに由来するだろう。

シュムペーターはこの「方法論争」に二つの位相を区別する。一つは「社会政策学」と関わる争点、もう一つが(経済学における)「歴史学派」に関わる争点である。社会学成立史では、前者の社会政策学との関わりが重視されてきた。そこで問われていたのは、科学と価値判断との関連であり、「価値判断排除」「価値自由」「没価値性」がキーワードをなしていた。実際、後年ドイツにおいて「社会学会」が「社会政策学会」から分岐する形で創設されたとき、踏み絵をなしていたのは「科学と価値判断」をめぐる争点であった。

*大河内一男の研究(1936)以来、社会政策学の形成過程において「科学と価値判断」の問題がいかに大きな役割を演じたかについて、繰り返し論じられてきた。この問題が「社会学会」創設の際にも大きな影響力を揮ったことについては、米沢和彦の研究(1991)が示唆的である。日本では、社会学の形成史の関わりでシュムペーターのいう第一の位相のみが、やや過剰に論じられてきた。

シュムペーターによれば、「方法論争」における「歴史学派」と社会政策学的方向とは、事実上多くは合体しているが、原理的には相互に分離するものであるという。しかも二つの位相のうち「純粋科学的意義を持つ方向」は歴史学派との関わりであるという(訳、278ページ)。というのは、社会政策学派との論争は、経済学史から見れば「しかし以前に示したように、すでに古典学派が取り扱ったところである」(訳、276-7)からである。

シュムペーターの示唆に従い「古典学派」の章を見てみると、そこで賭された論点は、「議論を経済理論に局限する[経済学を純粋経済理論に限定する]のとならんで、現状がなんであるかの研究と理想がなんであるかの論議の分離、すなわち

科学と政策との分離を求める要求」(訳、146)に関する是非であることが分かる。社会政策学は科学と政策との分離を認めない。こうした立場は、「理論的ならびに歴史的な研究用具なくして、科学研究が直ちに实际的時事問題に直面する」ものであり、「純粋に科学的な討議の実践はこのような状況のもとでは困難ならしめられる」(訳、276)、それゆえ、メンガーもシュモラーも、彼らが「経済学者」である限り、ともに反対した。メンガー＝シュモラー vs. 社会政策学、という戦線が方法論争の前提として、経済学界においてはすでに形成されていたのである。

シュムペーターにおいては、〈社会政策学に対する論争〉の位相については、経済学では、すでに決着がついた問題として簡単に処理される。そして、1883年に戦端を開かれた方法論争の真の論点として「理論」の位置づけ、理論と歴史との関連、数理的方法の問題等々が取り出される。それらの論点をリトマス試験紙として用いて、さまざまな学派の対立の様相は浮き彫りにされている。

経済学では、どうして社会政策学の提起した問題を軽く一蹴することが可能なのか。シュムペーターの「古典学派」について記述を見直してみよう。最初にあるのは「経済学を純粋経済理論に限定する」ことであり、このことを認めれば、「ならびに」で繋がれた第二項「科学と政策の分離」は論理的コロラリーとして、難なく導き出すことが可能になるからである。経済学と社会政策学とをめぐる真の争点は、〈経済的なもの〉をめぐる学問を純粋化することの是非をめぐる意見の不一である。科学と政策との関係は、この第一の争点から派生するものにすぎない。歴史学派といえども、経済学は〈経済的なもの〉をめぐる純粋化すべきことを求める点では、数理理論的経済学と何ら変わるところはない。それ故社会政策学を「経済学」の埒外に放逐することが出来たのである。

シュムペーターの設定した〈純粋経済理論 vs. 社会政策学〉という二項対立図式、「科学と政策」の関係の基底に「学の純粋化」の是非をおくような図式を、「社会学」に援用することは出来ないのか。「社会学」における「純粋理論」の可

能性を追究すれば、「社会主義」との区別が首尾よく打ち出されるのではないか、こうしたアイデアに駆動され「社会学」の専門科学化は出立した。

もしも「社会学」が〈社会的なもの〉に関する「純粋理論」として自らを提示することが出来るなら、「社会学」は、「経済学」と同じ資格で、アカデミーのなかで市民権を得られるはずである。こうして、80年代に提起された「方法論争」は、1890年代に入ると社会学に引き継がれることになった。社会学の専門化は、1890年代以前には起こりえなかった学問的動向といえるだろう。

社会学における〈純粋社会理論化〉のための方法論争は、経済学のそれと、見かけは同一である。しかしその内実を見れば、大きく異なっていたといわざるをえない。経済学の場合、論争が始められた1880年においては、経済学の〈経済的なもの〉への自己限定は、「古典学派」というかたちで、その実質はすでに出来上がっていた。「方法論争」の役目は、自明の前提を意識化させ、方法的にリファインさせるところにあった。伝来の荒削りの作品に磨きをかけることが、その使命であった。

社会学の場合は、そういうわけにはいかない。〈社会的なもの〉に自己限定した社会学的業績と広く認定され、「伝統」として寄りかかれる程の作品は存在しないからである。方法論争によって研ぎすまされた方法によって「純粋社会理論」を打ち立てることは、今後の課題として未来に投げ出されていた。「方法論争」は、すでにあるもののブラッシュアップではなく、無から有を作り出さねばならない。経済学では、野放図に育った苗木を剪定するというのが方法論争の役割だとすれば、社会学では、方法論争は「木を植える」ことから始めなければならない。

* 「科学的価値判断」の問題も、価値判断に先立ち「純粋社会理論」に関するイメージが共有されていないために、社会学の場合、主体の意識的統制による「禁欲」の持つ比重が極めて大きい議論が展開されることになった。経済学においても、いつの時代でも価値判断の「実的な適用」に関する「禁欲性」において問題がある学者が多かったという（訳、148）。しかし、「純粋経済理論」のイメージが共有されている場合、科学的認識と価値判断とを事後的に

弁別することはそれほど難しい作業ではない。価値判断排除は、経済学者の守るべき「倫理」というより、構築される経済「理論の質」の問題へと、より大きな比重で帰責されていた。

「経済学」において〈経済的なもの〉を分析するための装置として開発されたのが「市場（マーケットメカニズム）」である。経済学を純粋化すると、経済学の研究対象を「市場」へと自己限定してゆくことである。〈経済的なもの〉の生成・発展・消滅する場合こそ「市場」に他ならない。経済学（＝純粋経済理論）と社会政策学との対立は、国家と市場の対立と二重写しにすることが可能である。社会政策学は、国家による市場の統制を求め、それに対して経済学は市場の国家による規制からの解放を求めた。

経済学の発展とともに、19世紀全体を通じて、政治的なものと経済的なものとの分離、国家と市場の二元論が次第次第に練り上げられた。社会学が依拠してきた国家と社会との二元論から見れば、「社会」のなかから、〈経済的なもの〉が「市場」というかたちで取り去れるようになったことを意味する。本来「社会」は産業化によって力をえてきた〈経済的なもの〉を位置づける受け皿として構想された場所である。〈経済的なもの〉が「社会」という外皮を脱ぎ捨て、「市場」として自立化するプロセスが、「社会学」の専門科学化の裏面で進行していたのである。シュムペーターはいう、「公平に見れば古典学派は拙い社会学を持っていたのではなく、一般に何の社会学をも持っていなかったというべきであろう。」（訳、176）。

「経済」が巣立ち今や「空き巣」となった「社会」、それに対応するように「社会の科学」から「経済学」は独立していった。19世紀中葉に構想された社会学は、〈経済が取除かれた社会〉の認識に専門特化するために性格替える必要がある。こうして〈社会的なもの〉の純粋理論化を求めて、1890年以降、社会学の専門科学化が押し進められることになる。

引用文献

Abrams, Philip, 1968, The Origins of British Sociology 1834-1914, The University of Chicago Press.

- Collins, Randall, 1985, *Four Sociological Traditions*, Oxford University Press (友枝敏雄訳者代表『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』1997年、有斐閣。)
- Durkheim, Emile, = 1899, *Textes 3*, 1975, Les Editions De Minuit. (森博訳『社会主義およびサン・シモン』訳者解説、1977年、恒星社厚生閣)
- Engels, Friedrich, 1845, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England: Nach eigener Anschauung und authentischen Quellen*, In *Marx Engels Werke 2*, 1990, Dietz Verlag Berlin (岡茂男訳『イギリスにおける労働者階級の状態: 著者自身の観察および確実な文献による』『マルクスエンゲルス全集 2, 1844-1846』1960年に所収、大月書店)。
- Freyer, Hans, 1931, *Einleitung in die Soziologie*, Verlag von Quelle & Meyer. (阿閉吉男訳『社会学入門』1955年、角川文庫)
- 田中拓道、2006、『貧困と共和国: 社会的連帯の誕生』人文書院。
- 大河内一男、1936、『独逸社会政策思想史』日本評論社。
- Schumpeter, Joseph A., 1914, *Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte*, In *Grudriss der Sozialoekonomik*, Bd 1-At 1 (中山伊知郎・東畑精一訳『経済学史:

- 学说ならびに方法の諸段階』1980年、岩波文庫)
- Stein, Lorenz von, 1850, *Geschichte der socialen Bewegung in Frankreich von 1789 bis auf unsere Tage*, 3 Bde. *Drei Masken*.
- Tönnies, Ferdinand, 1907, *Die Entwicklung der sozialen Fragen*, Goeschen.
- 廳茂、1994『社会科学思想史としての社会学史へ——ドイツ社会学史への視点』『社会学 理論・比較・文化 (長谷川善計教授退官記念論文集)』晃洋書房。
- 宇賀博、1990、『アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣。
- 米沢和彦、1991、『ドイツ社会学史研究』恒星社厚生閣。

注記

- 厚東洋輔、2009、「問題としての〈社会的なもの〉」〔社会的なものの興亡 (その1)〕、『関西学院大学社会学部紀要』108号。
- 厚東洋輔、2011、「ジンメルと『個人と社会』問題」〔社会的なものの興亡 (その3)〕、『関西学院大学社会学部紀要』112号。

本稿は、前々稿と前稿の間に入るものである。

Society as the Locus of Class

ABSTRACT

Most various issues are identified as social problem. In the first half of the nineteenth century, social problem was considered to be composed of two elements: problems concerning pauperism, which resulted from poverty, and those concerning morals, such as delinquency and demoralization. From the perspective of class, various forms of social problem can be classified as one unified problem.

Differences between classes lead to poverty, which in turn leads to the deterioration of morals. In addition, such differences create morally corrupt people, and immoral practices become a breeding ground for poverty. Poverty and moral deterioration are generated as a set on the condition that the structure of class is reproduced. “Social problem” originates in the class structure of society. No social problem can be solved unless this class structure is rebuilt.

The view that society is made up of classes was able to clearly identify the causes of social problem and to ascertain the solutions to that problem. Since the mid-nineteenth century, the class model of society that equates the concept of “the social” with that of “class-oriented” has gradually been developed and come to be refined. Friedrich Engels and Lorenz von Stein are the noted founders of the class model of society.

Engels and Stein held contrasting views on establishing means of solving social problem, although they shared the same approach of contrasting “society” with “state” to understand social problem. Engels introduced the idea of “socialism” that relies upon the self-organizing process of society by itself, while Stein founded the idea of “social policy” that advocates the reform of society by the government.

Key Words: pauperism, class, state vs. society